

## “ハーン農業発展論” 研究序説

佐藤俊夫\*

平成8年6月24日受付

### A Preliminary Study on "HAHN's Theory of Agricultural Development"

Toshio SATO\*

In this paper, to understand systematically the theory of agricultural development presented by HAHN who was a German agricultural geographer and ethnologist, we remarked an outlines of HAHN's theory by using the present results of its researchs in Japan and tried to search out the further subjects for a deep study of HAHN's theory. The results of this study were as follows : firstly, on agricultural geography HAHN classified the world agricultural forms into six types such as hunting and fishing, hoe-, garden- and plough-culture, nomadism and plantation, and on the base of these forms, determined the order of agricultural development ; secondly, in ordering the agricultural development, he adopted the methods as a complex of culture - for example, he gave the elements of calender, car, plough, corn, domestication of cattle and bullock and so on as the factors affecting the development of plough-culture and make clear their history of origin from his own viewpoints of religion ; and thirdly, he proposed the idea of symbiosis between a human being and nature. But it was for us to have better understandings of the ordering of agricultural development by HAHN and to make clear causal relation between complexed factors of culture and so on.

#### 結 言

経済発展3段階説の批判者として著名な20世紀前後に活躍したドイツの農業地理学・民族学者であるハーンの名前は我が国でも民族学の領域でも、農学の領域でもしばしば登場する。民族学の領域では祖父江孝男に登場し<sup>18)</sup>、また、農業起源論の領域で20世紀の古典とも評価

されている“農業文化の起源”の著者であるヴェルトにも、とくにヴェルトの文化複合という考えに大きな影響を与えたといわれる。文化複合という考えは、農業の性格を、ただ単に農具や作物の種類などで規定するだけではなく、そのほか、食器や土器、醸造方法、家畜の種類のみならず、その利用方法などあらゆる物質文化の複合体として把握するものである<sup>21)</sup>。また、家畜文化史の領

\*鳥取大学農学部農林総合科学科経営管理理学講座

\*Department of Farm Business Management, Faculty of Agriculture, Tottori University

域でもハーンの研究は活用されており、その代表作は加茂<sup>11)</sup>である。ハーンの研究は農業の領域でも農業地理学の観点からと同様に、農法論の観点から取り上げられており、例えば前者についてはワイベル<sup>20)</sup>やクルチモフスキー<sup>14)</sup>があり、後者については加用<sup>12)</sup>、熊代<sup>15)</sup>、さらに岩片<sup>8)</sup>がある。これらの著作でハーンは経済発展3段階説の批判者、耨耕範疇の確立者、あるいは文化複合論の創始者であるとされる。

以上のように、ハーンは民族学、農業地理学・農法論の諸分野で大きな業績を挙げているので、本論ではハーン理論の体系的な理解のための予備的考察として、我が国の先行研究の成果を援用しつつハーン農業発展論の内容を概述し、これを踏まえてハーン理論の民族学上・農学上の意義を整理するとともに、新しい観点から、つまり、自然と人間の共生-供犠の意味付けに関しての観点からハーンの現代的意義を強調する。加えて、ハーン農業発展論をより深く体系的に理解するために必要と思われる今後の課題を明確にしたい。

なお、以下で利用するハーンの本書はいずれも九州大学附属中央図書館所蔵“西欧農学古典文庫”<sup>16)</sup>—これはかつて九州大学農学部教授として在職されていた小出満二、木村修三両先生の主に西欧古典農学に関する蔵書を基に岩片磯雄教授が従来農学部図書館に所蔵されていた稀書、ならびにその後収集したものを合わせて作られたものである—に納められている貴重図書である。その閲読を許され、感謝する次第である。

#### ハーン主要著作の概略

ハーンは上述の通り農業地理学者で民族学者であり（ハーンについては岩片<sup>9)</sup>によると経済史家、文化人類学事典<sup>10)</sup>によると経済地理学者・民族学者、また、加茂<sup>11)</sup>によると民族学者・動物地理学者とされるが、本論では前記の通りとした）、1856年8月7日に Lübeck で生まれ、1928年2月14日に Berlin で没した。

ハーンは最初、医学、それから自然科学を、しかも Jena、Greifswald そして Leipzig の各大学で学んだ。Jena で彼は進化論の領域で著名な反復説の提唱者である HAECKEL によって博士号を授与された。そして彼は 1886年に Leipzig から Berlin へ移りそこでの RICHTHOFEN を中心とした家畜飼養に関するグローバルな問題への取り組みを通して民族学や社会学に関心をもった。彼は民間の学者として Berlin の人類学、民族学および原始学会 Gesellschaft für Anthropologie, Ethnologie und Urgeschichte の発展に貢献した。彼は 1910年に大学教授

の資格を獲得し、後に Berlin 農業単科大学 Landwirtschaftlichen Hochschule Berlin で教師の仕事を得たけれども、死に至るまで員外教授の肩書で無給の講師のままであった<sup>17)</sup>。

ついでハーンの主要著作であるが、それは HAHN<sup>1-5)</sup> である（以下、便宜的に HAHN<sup>1)</sup> を“家畜”，HAHN<sup>2)</sup> を“経済的耕作”，HAHN<sup>3)</sup> を“経済労働”，HAHN<sup>4)</sup> を“犁農耕”，HAHN<sup>5)</sup> を“耨耕”と略称する）。以下、これら 5つの著作の内容について概述する。この場合、これら主要著作の章別の内容を示した第 1 表が参考になると同時に、岩片の成果を利用する<sup>9)</sup>。なお、岩片<sup>9)</sup>は先に述べた“西欧農学古典文庫”に納められているイギリス農書中 33 点、ドイツ農書中 34 点の解説であり、この中にハーンの著作も含まれている。

①“家畜”について。ROSCHER らにはじまる経済発展 3 段階説に対して、自然学者 HUMBOLDT や経済学者 HILDENBRAND、BUCHER らは、世界諸民族の中には、遊牧を知らずに農耕を行っているものが少なくないことから、多くの疑問をもっていた<sup>15)</sup>。このような背景のもとに、ハーンは狩猟-漁撈段階の後期には、女性による食料採取とあわせて、耨耕（これには掘棒によるものも含まれる）が始まり、それを通じて牛が馴化されて犁農耕へと進化したと同時に、定着農業に適さない自然環境のところでは、遊牧が始まったものとした。

②“経済的耕作”について。“家畜”が膨大かつ難解であったので、本書は耨耕の成立、園耕への移行、さらに農耕への発展を平易を旨として書いたものである。

③“経済労働”について。本書は BUCHER の“労働はすべての経済現象の出発点であるが、労働の本質については今日にいたるまで、国民経済学者によってまだよく明らかにされていない”<sup>3)</sup>としたことを重視して、労働の本質の把握には、人間労働の歴史的発展とあわせて地理学的・民族学的考察が必要であるとし、他面、植民地主義と結び付いた“プランテーション耕”Pflantagenbau について、これを“ヨーロッパ人のより高い知力が多数の非独立的な耨耕農民の力を自分達の目的のために統合した形態”だと規定して、各種の考察を行った。

④“犁農耕”について。“家畜”で、ハーンはすでに耨耕 Hackbau、園耕 Gartenbau、農耕-Ackerbau、後には Pflugbau と表現-の外にプランテーション耕や遊牧 Viehwirtschaft のような農業形態について述べ、耨や掘棒によって耕作する耨耕は、条件のいかんでは灌漑と施肥を伴う集約な園耕に発展するか、そうでなければ、地力の減耗のために移動耕作を行わざるを得ないとした。

第1表 ハーンの主要著作の章数と章別構成

章数	章別構成
家畜 6	動物学、普遍、利用、家畜（犬、牛、山羊、羊、驢馬、馬、豚、トナカイ、ラマ等36種類）、経済地理（狩猟と漁撈、耨耕、プランテーション耕、園耕、遊牧、農耕）、個々の国の経済事情（西アジア、ヨーロッパ、アフリカ、インド、中国、日本等13地域）
経済的耕作 20	文化とその時代、人間の最も早い始まりと発展原理、耨耕の起源、耨耕は女性労働により、農耕は男性労働による、農耕の形態・段階そして過渡期、園耕、時代及び文化の起源についての推論、耨耕の時代へ、石器時代の文化的成果、ペルーにおける耨耕作、社会国家の理想としてのペルー、遊牧民、農耕の起源とその個々の要素、世界の君主としての天空の星と車の発明、農耕における牛、バビロニア、エジプト、中国、インド、終わりに当たって
経済労働 12	序、いかにして労働が生じるか、ミルトンと野蛮国、我々は未開民族をどのように観察すべきなのか？労働と女性、人間・発展の産物・火と人間、母権、所有と権利と女性、労働事情と所有事情とは互いに結びついている、女性と植民地政策、女性生産物の増加、終わりに
犁農耕 17	序、緒言、採集民、耨耕、犁農耕の地理的伝播、暦、車の起源、経済家畜の飼養の起源、人間経済における乳の採用（起源と形成）、牽引獣の起源、去勢牛の起源、独身制及び類似の現象、犁農耕と去勢牛、用具としての犁の起源、穀物、穀物圃場、終わりに
耨耕 5	序説、耨耕は犁農耕の前に位置する（土地耕作の起源、3段階説、女性の役割、母権、耨耕等21項目）、犁農耕（植物守護神、天空分割、車の起源、牛と月、男性と耕地等16項目）、家畜飼養と牧畜民（牧畜民は自立していない、遊牧、騎乗用獣等10項目）、展望（工業と土地経済、国家と土地、工業と土地、工業と農業等9項目）

出所：Hahn<sup>1-5)</sup>より作製。

これに対して本書では、耨から犁への転化、役畜および用畜利用を伴う犁農耕の形成を論じた。

⑤“耨耕”について。“家畜”と“犁農耕”の後を受けて、ハーンは本書で狩猟段階における女性による食物の採取から、耨の使用、それから犁の発明と役畜の馴化による犁農耕段階への進化という形で農耕文化の発展を普遍化した。そして犁農耕では生産力の増大によって用畜飼養が容易になり、動物質食料の増大と施肥に伴う地力維持と規模の拡大が可能になり、経済一般の高度化を基礎づけたものとした。なお、“犁農耕”と“耨耕”については和訳書としてハーン<sup>6)</sup>がある。

#### ハーン農業発展論の概略と方法

##### 1. ハーン農業発展論の概略

ハーンの“一大功績”は“3段階説を拒否し、収集、狩猟、漁撈ならびに耨耕（原文は手鋤耕作である……引用者注）をさらに一層普遍的な形態として主張し、犁農

耕（原文は犁耕である、以下、犁耕を犁農耕と表現する……引用者注）と遊牧生活とがある特定の地域に起こった経済形態であること”を主張したこと、といわれる<sup>11)</sup>。この場合、経済発展3段階説とは、農耕の前に遊牧を置くので“遊牧段階仮説”ともいわれるが、それは狩猟・採集民が、あらゆる生活領域で動物界にもっとも密着しているため、群居の大家畜を“馴化”し、牧畜民として拡大しつつ遊牧民となる。そこで遊牧は牧畜をも指す。この牧畜・遊牧である第2段階は第1の狩猟段階に比べて人口支持力が高いが、第3の農耕段階よりも低い。人口の増加につれて遊牧から農耕に移行し、定着する<sup>18)</sup>。

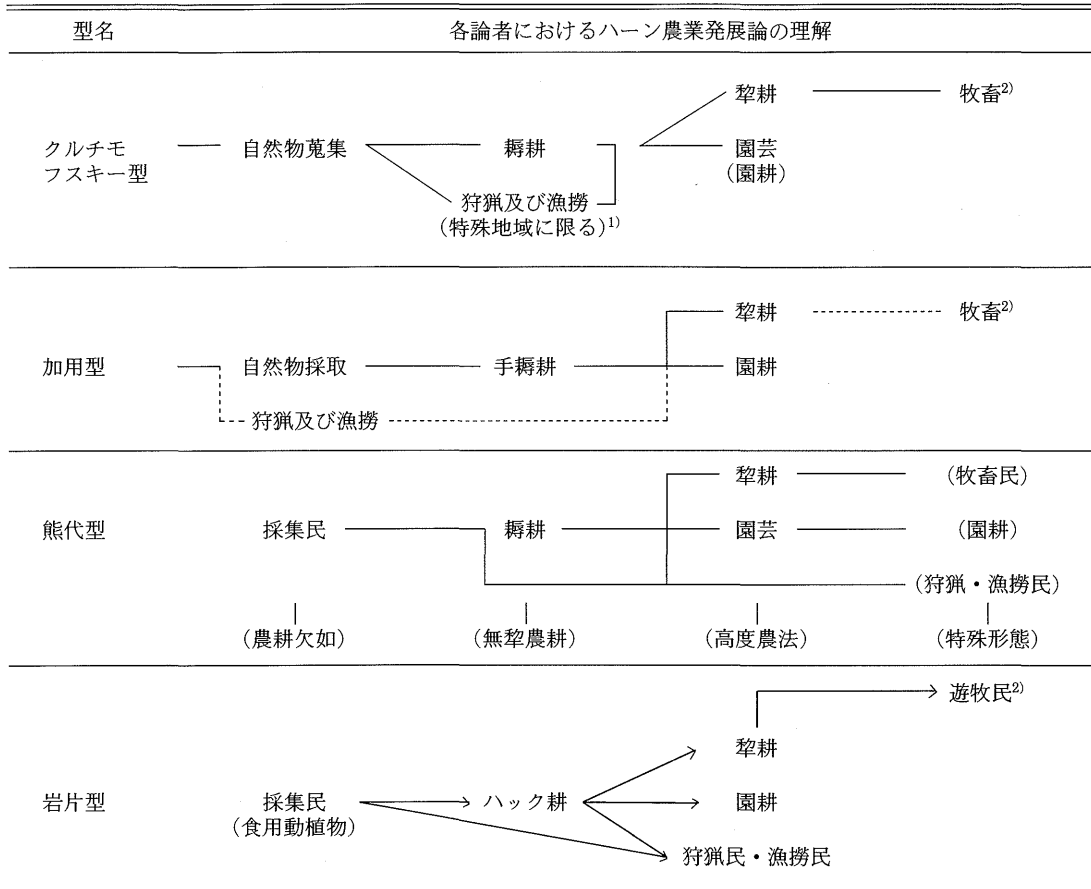
この“農業が狩猟＝漁撈→遊牧→農耕というシェーマに従って発達したという旧来の3段階理論あるいは遊牧民仮説”<sup>13)</sup>に批判を加えたのがハーンであり、この点については前述した。ハーンの批判論である彼の農業発展論の説明については第2表に示すとおり、クルチモフスキー型、加用型、熊代型、岩片型の4タイプがある。各

タイプ間には自然物蒐集、自然物採集、採集民、また、耨耕、手耨耕、ハック耕、さらに園芸と園耕などといった用語の違いのみならず、ハーンの農業発展論の理解をめぐる違いが見られるが、これらの違いの根拠のみならず、ハーンのこの発展論の正しい理解については今後の課題として、本論では主に岩片を参考にしてハーン農業発展論を概述する<sup>8)</sup>。

第2表中の熊代・岩片型によると、人間の初期段階は狩猟・漁撈ではなく、採集民であった。それは狩猟といえども、多少の道具とそれらの使用法の知識を必要とす

るからである。したがって初期の人々は、果実・塊根その他植物の可食部分、卵、その他大・小の動物を補食していたと考えた。やがて必要な道具を発明して狩猟・漁撈に従事し、放浪を始めたが、それはもっぱら男性の仕事で、女性は育児・妊娠のために、子供達とともにある程度一定の居所に留まり、火を守り、おもに食用植物の収穫・加工に従事した。やがて尖った棒を作り、それで塊根の採取などが容易になった。まもなくこれは掘棒や耨になる。そしてイネやモロコシなどの穀物まで作るようになった。

第2表 ハーン農業発展論における各論者の理解の違い



出所：クルチモフスキー<sup>14)</sup>、加用<sup>14)</sup>、熊代<sup>15)</sup>、岩片<sup>8)</sup>より作表

注一：なおまた狩猟および漁撈民族は同時に自然物蒐集者または耨耕者であることもある。

注二：このうち狩猟及び漁撈と牧畜は特殊地域にのみ生じるものとする。なお、加用<sup>14)</sup>は加えて、熱帯または亜熱帯の植民地に見出される栽植耕は土人労働者の使役による資本家的な経営であるが、農法的には耨耕に属する特殊な形態とする。

注三：本文中では犁耕の代わりに犁農耕という用語を、手耨耕、ハック耕の代わりに耨耕という用語を用いているが、図中は原文通りとした。

耨耕農民にとっては、天候の異変や病気はもっとも恐ろしい災いであった。このような災いから免れるためには、神の好む乳・肉・穀物などを祭壇に供えて神に祈るしかない。このような願望を込めて耨耕農民がまず馴化したのが、もっとも神聖な供儀を供しうる牛で、人間が馴化した最初の家畜だとした。その際、あらかじめ去勢するが、これは肉の風味をよくするための手段として、早くから知られた方法であった。ただし、去勢の理由についてのハーンの見解は宗教的であった。

なお、熊代は“ハーン説の画期的意義は、無犁農耕を耨耕で締めくくった点にある”として耨耕の重要性を強調している<sup>15)</sup>。この耨耕とは掘棒ないし耨を利用した土地耕作のことであり、女性および子供（成人前の男児をも含む）がその労働の主体になる。つまり、この段階で、女性たちが、狩猟・漁撈に従事し放浪する成人男性の代わりに、日々の家計の中心となり、一定場所で食用植物の収穫・加工に従事したことは上述した。この耨耕のもう1つの特徴は“家畜経済と土地経済との有機的結合がまったくないこと”である。確かに、豚、犬、鶏が耨耕において存在するが、それは“家の仲間”ないし“家計の仲間”として存在するだけであり、用畜、とくに獣力利用のために存在するのではない<sup>5)</sup>。

園耕は人工灌漑によって天候の変動に煩わされることなく、またおもに下肥を多量に施肥することによって、最大の収穫をあげる土地耕作の形態だとした。熊代は単に園耕と理解するのではなく、園芸→園耕として、園芸のさらに展開したものとして園耕を理解している。つまり、園芸は耨耕のやり方をじかに、しかし多くは集約的な形に変えて現代まで引き続いて営まれる栽培である。これを圃場にまで延長したものに日本を始めアジアで見られる園耕がある。その特徴は犁農耕を欠く手労働農耕と大家畜飼養の不緊密であるとする<sup>15)</sup>。

ついで前述の穀物と牛を馴化し、さらに耨を牛の牽引に適するように変形させれば犁ができ、結果、犁農耕が成立するが、耨耕に対する犁農耕の特徴の第1は、前述の通り、耨耕では労働主体は女性と子供であったのに対して、犁農耕では男性であることである。“穀物栽培地域のいたるところで神聖と見なされた行為に、男性が、神の神聖な召使を彼の神聖な用具につなぎ、そして神によって求められた犁農耕者として働いた”<sup>5)</sup>。ここで神聖な召使とは牛、とくに去勢牛のことであり、神聖な用具とは犁のことであり、耨耕は耨ないし掘棒を利用した女性などによる手作業であったのに対して、犁農耕では犁が利用され、しかもそれが牽引獣によって牽

引されたことである。そして第3に、犁農耕では穀物が、キビは圃地に留まったが、大麦や小麦のような穀物は圃場で栽培管理された。熊代はこれらの点に加えて、施肥の実行と飼料作物の出現を指摘している<sup>18)</sup>。

最後に、遊牧民はその生産物によって自給できるものではなく、乳や肉に加えて植物性栄養の補給が必要である。したがって周辺に植物栄養生産の余剰をもつ犁農耕農民がいて、交易によってこれを取得できるのでなければならない。第2表で犁農耕→遊牧民とは、犁農耕農民が遊牧に変わる意味ではなく、周辺に余剰をもつ犁農耕農民が多く形成されるならば、犁農耕に適さない地域で遊牧が成立するという意味である。

## 2. ハーン農業発展論の方法としての文化複合論

ハーンは上述の農業発展の動因の考察において、各種の農業形態の性格を“物質文化の複合体”として把握し、そしてそれを各種の要素に分解して考察する方法を採用した。つまり、ハーンは“我々は若干の文明と密接に絡み合った太古の経済形態を、はじめにすべてその基礎的要素に分解し、そしてその要素を個々にその生成にいたるまで観察”するとし<sup>4)</sup>、とくに耨耕を初発形態とする犁農耕の成立にかかわっては、犁農耕に関わる事柄を種々の要素に分解し、その要素それぞれの生成を耨耕とのかわりにおいて検討する方法をとっている。その要素とは、暦、車、経済家畜の飼養、人間経済における乳の採用、牽引獣、去勢牛、独身制、犁農耕と去勢牛、用具としての犁、穀物、穀物圃場である—“耨耕”ではとくに4要素に整理して検討が行われ、“牛という家畜、犁という用具、天空分割という観念方法、そして穀物圃場での犁への牽引獣の利用という方法”についてそれらの起源史や経営における位置を探求する、としている。これらの要素についてみると—これら犁農耕成立にかかわる諸要素についての詳細ならびに諸要素間の相互関連性については今後の検討課題としたい—、ただしこれらすべてについて論述できないので、以下ではいくつかの特徴的な点について述べる。なお、この場合、加茂に依拠するところが大きい<sup>11)</sup>。

① 暦について。耨耕農民は耨耕によって農業を営んでいるうちに、植物が芽を出し、そして実が成った後に枯れ、そしてまたその種子から芽が出るという現象を知った。一方、元来、農業は四季の循環や月の変化の知識と非常に密接な関係があり、時を計ることなくしては農業は成立しない。そして四季の循環はだいたい星の移動によって、月日の移り変わりは月の形の変化によって、知ることができた。このために、すべて古代の農業国では

暦や十二宮 Tierkreis が存在していた<sup>11)</sup>。十二宮について触れると、それは初めはバビロニア天文学で使用され、前800年以後ギリシャに伝えられた。宮のほとんどが動物名で表され、その名称がそのまま星座名にもなったが、黄道帯はギリシャ語ではもともと動物を意味し、それで獣帯とも呼ばれた。十二宮とは具体的には白羊宮、金牛宮、双子宮、巨蟹宮、獅子宮、処女宮、天秤宮、天蝸宮、人馬宮、磨蝸宮、宝瓶宮、双鱼宮である<sup>6,7)</sup>。

② 車の起源について。車の起源について述べることの意義について、加茂によると、“車はその牽引獣によってはじめてその存在の意義を得たから、車とその牽引獣との関係は重要な意義をもって、その牽引獣の種類や性質によって車の構造が制約される。したがって最初の車の構造を理解することが必要となる。そこで、その車の発生過程における車の構造の由来を明らかにすることは、その牽引獣との関連において大きな意義がある<sup>6,11)</sup>。

ハーンは車輪の起源について、バビロニアの太陽神から高僧に法典が授けられている光景を描き出している泥土板上の太陽象徴としての円盤、あるいは太陽神の祭壇に祭られている太陽円盤を車輪の原型とする。この太陽象徴である円盤は、糸を紡ぐときに用いられるはずみ車である。このはずみ車は、古くから象徴的な意味をもって、神に祭られていたが、ある時、僧侶が何かのはずみでその円盤を落としたとき、その円盤が転がることに気が付いて、2個の円盤の各々の中心に穴を開け、その中へ糸巻きの手先の先端をさし通し、これを軸として円盤を結び付けると、その2個の円盤が倒れないでそのまま転がり続けることを発見し、それから思い付いてこの軸の上に台を置いたものが車になった。このようにして偶然に作られた車は、最初は小型の模型であって、それは神聖なものとして神の祭器として祭られていたが、その後、この小型の車から大型の車が作られ、最初は神像を乗せ、神聖な家畜とされていた牛に曳かせていた。同時に、この車は同様に神聖であった王だけが乗る権利をもっていた。ところがしだいにこの車は運搬用具として俗事にも使用されるようになった<sup>6,11)</sup>。

③ 家畜飼養一牛一の起源について。耨で農耕を営んでいた原始人は、月の力は彼らの栽培する植物の成長に影響を与えると想像する一方、月が欠けることは月が悪魔に悩まされているか、または自ら病気のために弱っていると考えた。そこで月を元気づけ、再び満月の形に戻し、そしてその完全な力の回復によって地上のみりを実現させるために、月に供儀を捧げることが必要となっ

た。そしてその供儀獣として牛が選ばれた。この牛はそのツノの形がちょうど半月形で三日月の形に似ているために、当時の人々はこの牛が月となんらか関連があると想像し、その結果、この牛は月神の神聖獣と見なされた。

ところが、神は元来人間がもっとも好むものを供儀として要求する。したがって、人間は、新月の時にこれを元気づけるために野生の牛を捕獲し、これを月神に捧げていた。しかしこの供儀を不意に必要とする場合が生じた。それは月食の場合であり、当時の人間は月食がいつ起こるか予知できない。この不意の供儀の必要に応じるためには、人間はつねにこの供儀獣を手元に置いておかなければならなくなった。そこで平常の時にこの原牛を捕らえ、これを一定の柵の中に入れて生きたままで育て、不意に供儀が必要な場合に備えようとした。ところが、このようにして柵の中で野生の牛を放し飼いでいるうちに、交尾が行われ、子牛が生まれ、この子牛は最初人間の与える食物を食べなかったが、徐々に人間にも慣れ、人間の与えるものを食べるようになり、ここに慣らされた牛が発生した。だがこれはまだ家畜ではなく、この牛は単に神への供儀獣に留まり、経済的意義を得ていなかった。そしてこの一定の馴化期間を経過するうちに、この馴化牛がしだいにその数を増すにつれて、人間はその内から特定の牛を選んで、これを供儀の用に当て、他のものを俗事に利用することを考え、ここに初めて本来の家畜としての牛が発生した<sup>6,11)</sup>。

④ 乳利用の起源について。上述のように、人間は最初、牛を供儀にしていたが、その後この家畜が農耕民にとって非常に有用であることが認識されるに従い、これを殺す代わりにこの動物の生産物で供儀を間に合わせることを考えついた。このようにして雌牛から出る乳が神に供えられ、そのために人間が絶えず雌牛から乳を搾っている間に乳の出る器官が刺激され、その結果、その部分が非常に発達した特殊な乳牛が発生した。そして最初僧侶がこれを飲み、その後この神聖な乳の利用から俗用の乳の利用への移行が行われた<sup>6,11)</sup>。

#### ハーン農業発展論の現代的意義

以上において我が国におけるハーン農業発展論を農業分野、民族学分野の種々の先行研究を援用しつつ整理した。以下、これらの要点を述べるとともに、別の側面からハーン理論の現代的意義に触れる。

農業分野におけるハーンの業績は前述の通り世界の農業形態の類型化とそれらの発展序列の定式化である。すなわち、ハーンは農業地理学・農法論の領域で世界の農

業形態を採集民、耨耕、プランテーション耕、園耕、犁農耕、遊牧の6タイプに分類するとともに、採集民から耨耕への進展、耨耕から犁農耕および園耕への進展、犁農耕と関係する遊牧-プランテーション耕は耨耕の1形態とされる-という発展序列の定式化によってその分野の深化・発展に貢献した。農業地理学に関しては、ワイベルによると、“我々は農業地理学においてはハーンのいわゆる農業形態の研究にまで到達する。農業形態とは、人類が植物および動物質の財貨を獲得しかつこれを利用しようと企図する様式の意味と理解できる。それは人類の形態ではなく、人類活動の形態なのである”、結局、“農業形態は個々の作物、もしくは、個々の家畜に関するものではなく、環境と交渉あるかぎり、農業経営のすべてに関する。つまりは、生物と環境との諸関係を研究対象とする生態学的観察方法（これに依拠する学問分野が生態的地理学である）の創始がハーンであるとする<sup>20)</sup>。農法論的には、一般的に、耨耕（原文では手耨耕……引用者注）→犁農耕→園耕の直線的な発展経路をとり、園耕をもって最高の発展段階にあるものをいう通説に対して、ハーンの説は“西欧的な犁農耕は原始的な耨耕の範疇を脱却して進化した農法であるに対し、東洋的な園耕は原始的な耨耕の範疇そのものの中で手労働農具=鋤が改良・進化した、手労働的に綿密・集約化された農法であって、ここにいわば西洋と東洋の農法上の質の差異があること”を推論させる<sup>12)</sup>。さらに、熊代はハーン説は“農耕の文化型、その発展段階を主要耕具である耨と犁をもって規定し、耨耕から犁農耕の文化を区分し、前者から後者への発達を一般化する”ものとする<sup>15)</sup>。

民族学的分野におけるハーンの業績は犁農耕の構成諸要因-厩、車、経済家畜の飼養、乳の採用、牽引獣、去勢牛、犁、穀物圃場-を一個の複合体として捉えたことであり、この方法がヴェルトによって継承発展されていく。ハーンの場合、この構成要素各々の起源が重要視されるが、その場合、前述のように、車の起源にしても、牛の飼養の起源にしても、宗教目的がその動機であった。KRZYMSKIによると、“ハーンは古代民族の農業と宗教との緊密な関係に人の注意を向け”、そして“多くの事柄において宗教が農業改良に動機を与えたところの第1の原動力である”とする<sup>13)</sup>。この宗教性に関するハーンの見解は多くの論者によって批判されている。例えば、車は宗教的観念と結びついて祭祀具から発生したこと、牛の馴化の動機、乳利用、去勢牛の発生因等に対する加茂の批判-例えば牛は農業上・生活上人間生活に有益になった結果として神聖化された<sup>11)</sup>、“家畜の宗教起源説

を除けば”という岩片の批判<sup>9)</sup>に加えて、上述の KRZYMSKI は、“ハーンの見解の中で、宗教が本源的に古代の諸民族の農業と緊密に関連していたことは恐らく正しい。しかし他面、我々は宗教的観念が最初の経済家畜の飼養、犁の発明などの動因となったというハーンの説を拒絶するに違いない。経済的動因が主因であり、その場合に、2次的に、経済的経験に基づいて宗教的観念が順応しそして農業的観念と緊密に結び付けられる”としている<sup>13)</sup>。

ハーンの農業発展の宗教的動機付け、すなわち、宗教起源説に対する上述の批判は当を得ていると思われるが、ハーンの説の宗教起源説の中の供儀に注目すると、ハーン理論の新しい評価が得られると考えられる。

“土地神や植物守護神でもある月神”<sup>6)</sup>の元気回復に供えることから牛の家畜化が始まるというのがハーンの見解であるが、この牛は供儀と呼ばれるものである。つまり、供儀とは“依頼者が知覚できない力に向かって、歓迎の意を表明するために、彼の所有物の1部分を引き渡し、つまり、何かあるものを断念し、あるいは何かあることを行わねばならないように、下位のものが、入手するものの1部分を上位のものに与えなければならない”ということである<sup>6)</sup>。また、“何かを得たいとするならば、何かを与えねばならない。成果を得たいという猟師は、猟の前に芝居じみた演技をしなければならない。しかしいづれにせよ、彼はもっとも簡単な、伝統によって定められた形式で高次の力の前へ願いを持ち出し、時々、獲物を捧げなければならない。したがって、将来、植物が芽を吹くに違いない土地に対しても、人が将来贈り物を土地に求める前に、何かを与えなければならない”、ともいう<sup>6)</sup>。供儀に関するハーンの見解はその他多くあるが、これ以上は冗長と思われるので省略するが、要するに、人間が何かを得ようとすれば神にお願いすることになる、しかしその場合、人間の大事なもの（牛・農作物など）あるいは大事なこと（断食とか禁欲など）を神に捧げねばならない。人間は神にお願いし一方的に何かを得るのではなく、何か贈り物をせねばならない。この場合、神=自然と置き換えることが許されるならば、人間-供儀-神という考えを人間-供儀-自然という考えに読み替えることもできるであろう。すなわち、人間-供儀-自然という考えを別言すれば、人間にとって自然はもっぱら奪う対象ではなく、自然から得たものの1部分をまた自然に還元し、自然が自然として存続出来るよう尊敬し、思いやりを与える対象であるともいえるし、このことを敷衍していえば、“人間と自然との共生”と

いう考えともいえる。したがって、ハーンはこの人間と自然との共生思想の提唱者とも考えることができる。

### 結 語

以上、我が国の従来の研究成果を援用しつつ、ハーン農業発展論を概略的に理解した。すなわち、それは第1に世界の農業形態を農業地理学・農法論的に狩猟・漁撈、耨耕、園耕、犁農耕、遊牧、プランテーション耕の6タイプに類型化するとともに、これらの形態をもとにして農業発展の序列を定式化したこととくに耨耕→犁農耕という発展序列の定式化は遊牧→農耕という3段階説の否定を意味することに留意すべきである一、第2に農業発展の序列化に際して文化複合という方法を採用したことであり、とくに耨耕から犁農耕への展開の要因として暦、車、牛の家畜化、去勢牛などの要素を挙げ、それらの起源が耨耕に求められることを彼独自の宗教的観点から明確化したことであり、そして第3にその宗教的観点を現代流に解釈すれば、“自然と人間との共生”思想を提唱したことという内容を持つものとして理解できる。しかしハーン理論の体系的理解のためには農業の発展序列の理解をめぐる第2表中の各論者の食い違いの是正、犁農耕要素の相互関連性、合わせて、その中での供犠の位置づけ、発展序列論と文化複合論との関連性など、さらに解決すべき課題も多い。したがって、これらの検討を通じてハーン農業発展論を体系的に理解することが我々の今後の課題である。

### 参 考 文 献

- 1) Hahn, E., : Die Haustiere und ihre Beziehung zur Wirtschaft des Menschen. Duncker und Humblot, Leipzig (1896)
- 2) Hahn, E., : Das Alter der wirtschaftlichen Kulture der Menschheit. C. Winters, Heiderberg (1905)
- 3) Hahn, E., : Die Entstehung der wirtschaftlichen Arbeit. C. Winters, Heiderberg (1908)
- 4) Hahn, E., : Die Entstehung der Pflugkultur (unseres Ackerbaus). C. Winters, Heiderberg (1909) p.182
- 5) Hahn, E., : Von der Hacke zum Pflug. Qulle und Meyer, Leipzig (1919) pp.44, 58, 78
- 6) E.ハーン：犁農耕成立起源論。川波剛毅，佐藤俊夫共訳，農林統計協会，東京（1994）pp.63, 71, 149-165, 170-185, 188
- 7) 平凡社世界百科辞典。平凡社，東京（1975）pp.55 5-6, 561-2
- 8) 岩片磯雄：古代ギリシアの農業と経済。大明堂，東京（1988）pp.147-152
- 9) 岩片磯雄：西欧農学古典文庫解題。九州大学農学部農政経済学科，福岡（1985）
- 10) 石川栄吉・梅棹忠夫他編：文化人類学事典。弘文堂，東京（1987）
- 11) 加茂義一：家畜文化史。法政大学出版局，東京（1973）pp.202, 204-205, 517-519, 535-536, 551-552, 555
- 12) 加用信文：日本農法論。御茶の水書房，東京（1972）pp.43-44
- 13) Krzymowski, R., : Geschichte und Verbreitung der Landbausformen nach Eduard Hahn. Fuhlings Landwirtschaftliche Zeitung, 13 315-322 (1916)
- 14) R.クルチモフスキー：農学原論。橋本伝左衛門，西ヶ原刊行会，東京（1932）p.345
- 15) 熊代幸雄：比較農法論。御茶の水書房，東京（1969）pp.3, 14, 16-18
- 16) 九州大学農学部西欧農学古典文庫。九州大学農学部農政経済学科，福岡（1993）
- 17) Neue Deutsche Biographie. Duncker und Humblot, Berlin (1970) pp.504-505
- 18) 農政調査委員会編：体系農業百科事典・農業経営。農政調査委員会，東京（1967）p.5,6
- 19) 祖父江孝夫：文化人類学入門。中央公論社，東京（1990）
- 20) L.ワイベル：農業地理学の諸問題。伊藤兆司訳，古今書院，東京（1942）p.7
- 21) E.ヴェルト：農業文化の起源。藪内芳彦，飯沼二郎共訳，岩波書店，東京（1968）